ライフ　#教育　#親子関係　2020/12/05 11:00

名門小学校の元副校長が「最近の親子は距離が近すぎる」と嘆く理由

失敗は早めにさせたほうがいい

PRESIDENT Online ／PRESIDENT BOOKS

田中 博史
筑波大学附属小学校副校長

“友だちのような親子”が増えているといわれるなか、「いまの親と子どもとの距離はとにかく近すぎる」と嘆くのは、筑波大学附属小学校の前副校長で、授業・人塾を主宰する田中博史氏。親が子どもにかかわりすぎると、これからの時代に重要な「立ち上がる力」を身につける機会を逸してしまうと指摘する。教育の専門家16人が、先行き不透明な時代の子育てに「これだけは大切なこと」を語った書籍『究極の子育て 自己肯定感×非認知能力』（プレジデント社）から、その論稿を抜粋して紹介する。

※本稿は、おおたとしまさ・監修、STUDY HACKER こどもまなび☆ラボ・編集『究極の子育て 自己肯定感×非認知能力』（プレジデント社）の一部を再編集したものです。

子育ての大前提として大切な「子どもとの距離感」

子育ての大前提として、とても大切だとわたしが考えていることをお伝えします。

それは、親がしっかり身につけなければならないのは「**子どもとの距離感**」だということ。これは、遠過ぎても近過ぎてもよくありません。遠過ぎれば親の目が届きませんし、近過ぎれば親からの影響を受け過ぎるということになるからです。

でも、子どもと適切な距離を取ることはそれほど簡単ではありません。

一度に数十人の子どもを相手にしている教師なら、それぞれの子どもとの距離を比べ

られることもあって、子どもと適切な距離を比較的取りやすいのですが、たとえきょうだいがいても、限られたわずかな人数のわが子との距離を親が客観視することは、意外に難しいものなのです。

写真＝iStock.com／Feodora Chiosea

※写真はイメージです

子どもとの適切な距離を知るには「自分の気持ち」に注目

意識してほしいのは、「**子どもを見ているときの自分の気持ち**」です。

子どもを見ていて「うちの子、まんざらでもないな」というふうに余裕を持って思えているときはちょうどいい距離にあるということが多いものです。

一方、イライラしているときというのは、距離が遠過ぎるか近過ぎるかのどちらかですから、対処が必要になる。

親と子どもとの距離を“磁石”でイメージ

親と子どもが磁石だとイメージしてみてください。

親子の適切な距離というのは、磁石がくっつきそうでくっつかない距離のことです。

その距離を見つけるには、まずはいったん気持ちのうえで子どもから引いてみましょう。つまり、**距離を取って意識的に遠ざかる**というわけです。

たとえ元の距離が遠過ぎたという場合にもさらに距離が開いただけですから、今度は少しずつ近づけばいいだけのことです。

逆に近過ぎた状態からさらに近づいてしまうと、磁石はぴったりくっついてしまいますよね？　いったんその状態になってしまうと適切な距離に離れるのはなかなか難しく、必要以上に子どもにかかわってしまうということになります。

子どもを見てイライラしたら、まずは引いてみる――。そう心がけてください。

「転ばぬ先の杖」が子どもの成長を妨げる

わたしが見る限り、**いまの親と子どもとの距離はとにかく近過ぎる**ようです。

すぐに「転ばぬ先の杖」を差し出してしまい、子どもが自分で考えたり失敗したりすることは減る一方です。

その反面、子どもは「最初から成功しなければならない」と強いられています。それでは、子どもが失敗を恐れて挑戦することを敬遠するようになるのもあたりまえのことですよね。

しかも、親によって「最初から成功しなければならない」と思わされた子どもの場合、とくに失敗を恐れたり挑戦を敬遠したりするのは、「親が見ているところ」ということになります。

そして、失敗をして立ち上がるという経験もないのですから、親が見ていないひとりぼっちの場面で挑戦をして失敗してしまえば、大きな心の傷を受けるということになってしまうのです。

親が見ているところで子どもに失敗させてあげる

本来なら、これは逆であるべきでしょう。

親が見ていて手を差し伸べられるところで失敗して立ち上がる経験をさせてあげて、子どもがひとりのときには失敗をしない、あるいは失敗をしてもしっかり立ち上がる力をつけさせてあげるべきではないでしょうか。

だとするならば、子どもが勇気を出してなにかに挑戦しようとしたときには、親は結果など気にせず、それこそ適切な距離を取って「うちの子は成功するかな？　失敗をするならどんな失敗をするかな？」と、ニコニコとしてただ見ていてあげればいいのです。

そうすれば、子どもは親の顔色を窺ってビクビクするようなことなく、たとえ失敗をしても何度でも挑戦する人間に育っていくはずです。

「人間関係における失敗」は早めに経験を

「失敗」というと、スポーツや勉強など個人的なものをイメージする人が多いでしょう。でも、**社会生活を営む人間としてきちんと成長するには、「人間関係」における失敗をなるべく早くにしておくことも大切**です。

いまの親は、他の子どもやその親とのトラブルを避けようとするあまり、どうしても子どもを「安全圏」に入れてしまう。だから親が見ている前では“事件”は起きません。

でも、そのまま体だけが成長して親が制御できなくなったときに、親が見ていないところで子どもが誰かと摩擦を起こす事件が起きてしまったら……？　いじめなど深刻な問題を起こしてしまうということになりかねないのです。

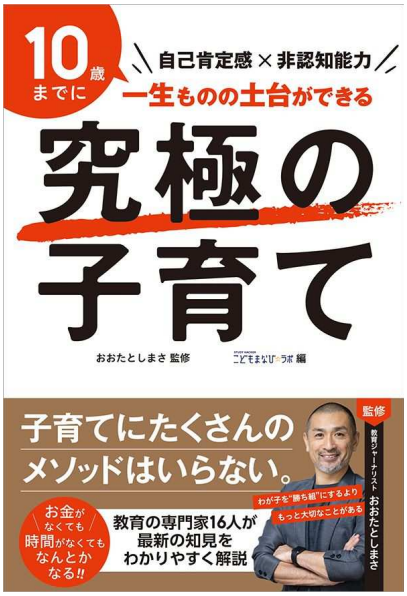
子どもから“離れて”様子を見てみる

もちろん、いくら幼い子どもであっても、他の子どもに暴力を振るうようなことは止めなければなりません。

でも、**親同士が見ている前で幼い子ども同士がちょっとした「失敗」をすることは、そのあとにきちんと人間関係を築いていくためにはとても大切なこと**です。

公園やショッピングモールのキッズルームにでも行ったのなら、子どもに近づきたくなる気持ちを抑え、自分の子どもがまわりの子どものなかでどのように関係性を築いていくのかを見てあげてください。

その様子を「あ、ほかの子にボールを取られちゃった」「怒るわけでもないし、穏やかでいいじゃない？」「もっと積極的になってほしいな」というふうに夫婦で実況中継なんてできたら、それこそ子どもと適切な距離を取れて、いい子育てができるのではないでしょうか。



おおたとしまさ監修、STUDY HACKER こどもまなび☆ラボ編『究極の子育て』（プレジデント社）

田中 博史（たなか・ひろし）
筑波大学附属小学校副校長
1958年生まれ、山口県出身。山口大学教育学部卒業後、山口県内の公立小学校3校の教諭、筑波大学附属小学校教諭を経て、2017年から同校副校長。2019年3月に退職後、現在は筑波大学人間学群非常勤講師の他、「授業・人（じゅぎょう・ひと）塾」という教師塾の代表を務める。専門は算数教育、授業研究、学級経営、教師教育。これまでに全国算数授業研究会会長、筑波大学学校数学教育学会理事、学習指導要領実施状況調査委員などを歴任。著書に『田中博史の算数授業実況中継』（東洋館出版社）、『子どもに教えるときにほんとうに大切なこと』『子どもと接するときにほんとうに大切なこと』（ともにキノブックス）などがある。

#教育　#親子関係　#書籍抜粋

© PRESIDENT